

一瞥したあと、空然は里見実堯を一瞥し

「このこと、里見家は知っておるのか？」

「いえ、一向に」

「うむ」

二度読み直して、空然は書状を懐に押し込んだ。

「鎌倉という場所は、格式と建前ばかりで、面白くもない処である」

空然はぼそりと呟いた。

独り言なのか、判別もつかず、里見実堯は傍らの正木通綱を一瞥した。正木通綱もただ俯くだけであり、実堯もそれに倣った。

「房総とは、さぞや空気がうまかろうな」

「は？」

「いや、気にするな。戯れ言よ。大儀であった。

上総介にもよろしく伝えて欲しい」

鶴岡八幡宮から朝比奈切通しを経て、六浦湊に停泊している舟に向かう里見実堯は、終始傍らに控えていた正木通綱に

「八正院殿は還俗する気だな」

と呟いた。正木通綱もそう見ていた。

ここで空然が還俗したら、果たして古河公方家はどのようになるものか。

「まずは乱が起きようかの」

「真里谷を渦中にした乱でしような」

正木通綱は涼しげに呟いた。

「書物ばかりに執心の若殿にも、一統の夢より醒めて頂く好機であろう」

実堯もそう言葉を継いだ。

峠を越えると、木々の彼方に六浦湊の海が輝いた。この日は梅雨の気配もない夏の陽気である。この湊は、当時、鎌倉に赴く玄関口であった。

大きく帆を張った舟は六浦より発ち、みるみると三浦半島が遠ざかっていった。ここから鷹ノ島までは、江戸内海の潮流に乗ればいい。

「幼少の故地、覚えておいでか？」

里見実堯の言葉に、正木通綱は首を横にした。

三浦の地は、もはや異国であった。この地の思ひ出はひとつも心にはなかった。

「安房こそ、我が国なり」

江戸湾は風の如く静かであった。

程なく。

鎌倉を震撼させる事件が起きた。

なんと、前触れもないまま、空然が雪下殿を出奔したのである。墨衣を颯爽と脱ぎ捨てた空然は、一旦消息を絶った。

果たして還俗を唆した真里谷信勝のもとへと思いきや、意外にも、空然の向かった先は古河であった。

もともと空然にとつて、出家は体質に合わなかったのだ。契機としては不純かも知れないが、真里谷信勝の書状は、還俗する決意を後押ししてくれたのである。

このとき空然が古河へ奔ったのは、還俗こそ望むものの、他に野心がなかったことが窺える。少なくともこのときの空然には

「父や兄を蹴落として、関東の主とならん」という野心が微塵もない。

足利家の隆盛のためには、傍流という分を弁え、ひたすら家を支えるための一武将たらんと志していた。

が。

空然は古河で現実を識る。

鎌倉で聞かされた上杉顕定による調停は、表向きのことであり、政氏・高基とも、内実は未だに諍い会っていた。公式にはきちんと整っている」と報じられていた筈の和睦も、当事者は誓詞を交わすことなく、睨み合っていたのだ。

「父上、これはいったい」

空然は驚いて父・足利政氏に詰め寄った。

「この親不孝者め」

政氏は悪びれもなく空然を詰った。

「当家の男子は揃いも揃って父に逆らう、忌々しい限りなり」

と、久方ぶりの我が子を労いさえしなかった。ならば仲介をと乗り込んだ兄・高基も、その眼差しは厳しかった。

「儂に取って代わるつもりか」

その冷たい言葉が、肉親の情を無情に引き裂

いた。

まやかしの和解、父親への失望。

そのうち空然は奥州へと去るのだが、それはほんの僅かな期間であった。この空然が、関東を揺るがす風雲児と化して舞い戻ってくるのは間もなくのことである。

永正六年（一五〇九）七月、原式部少輔胤隆は足利高基との密議に養子・朝胤を差し向け、その忠節ぶりを大いに称えられた。

このとき胤隆は幾分病んでいた。そのため出家し、〈入道全岳〉と号していた。出家に際し、養子に後事を託しつつも、実権は未だ掌握していた。

主家たる千葉氏をも従える勢いの原氏は、紛れもなく、上総国の台風の目であった。この屈服こそ、真里谷氏にとって最大の課題であり、そのため、なりふりなど構っていられなかった。里見氏との盟約に応じたのも、旗頭として空然に目をつけたのも、そのためのことと思えば至極当然の仕儀なのである。

この頃。

足利高基は再び父・政氏と諍うために、再び関東の諸将を手懐けようとしていた。静謐を迎えていた関東の平穩は、この父子相克が、簡単に破ろうとしていた。

父子の相克が渦巻く足利公方家。

嫡庶割れる房総武田氏。

子の末を案じずにはいられない里見氏。

どの家にも事情があり、小さな形で済まぬものは分裂状態で刃を向け合っていた。

里見義通は小さな悩みを抱きつつも、冷静に情勢を見守っていた。

静かな燻りが古河公方家にあった頃、その調停者である関東管領・上杉顕定は、遠く越後にいた。

越後では関東上杉家の分家が代々守護職を司

っていた。特に越後上杉家は、関東管領山内上杉家より分かれたから血縁も濃い。その越後守護・上杉民部大輔房能が、なんと守護代・長尾為景により討ち取られ、国さえも奪われるといった事件が発生したのである。

下剋上の極みとはこのことである。長尾為景を討ち果たさんと、上杉顕定は軍勢を率いて越後へと乗り込んでいたのだ。

長尾為景。

のちに〈上杉謙信〉を名乗る長尾景虎の実父である。

上杉顕定から下野国足利の長尾景長へ差し出した、永正七年（一五一〇）六月二日付の書状には、関東留守中の懸念を伺う旨が記されている。すなわち父子和解を整えたはずの高基が、古河を抜けて関宿城に籠もったのではないかという点。雪下殿の空然が関東で挙兵したのではないかという点。そしてこの推測は、おおよそ当たっていたのである。

高基は築田高助の籠もる関宿城に移り、合戦の支度を急いでいた。この築田高助は、足利政氏の下で執事をしている築田政氏とは兄弟である。

空然は奥州から舞い戻り、武蔵国太田荘に籠もって父や兄へ対立する姿勢を示した。

そしてこれを好機とみた伊勢宗瑞も、上杉家を調略し権現山で挙兵させた。

留守中、足下に火がついた格好である。上杉顕定は冷静を欠いていたのかも知れない。そのためか、思いもかけぬ事態が起きた。

奇しくも書状が足利に着いたのと同じ六月二日、越後長森原にて、上杉勢と長尾勢が激突した。そして、この合戦で、なんと上杉顕定が長尾為景勢に討ち取られてしまったのである。

上杉勢は総崩れとなり、関東へ逃げ帰らなければならなかった。

この死をきっかけに、政氏・高基は再び対立をはじめ。関東管領・上杉家の後継者問題に足利家が関与したことが、諍いの発端だった。

古河公方・足利政氏の弟で顕定の養子となつた四郎顕実、顕定の又従兄弟で養子となつた五郎憲房、実子ではない後継者争いは、多くを巻き込むこととなる。顕実は実の兄・足利政氏に加勢を望んだ。片や憲房は政氏の子・高基に救いを求めた。常識なら余所の家のために父子が割れる無様はない。が、このとき、古河公方は双方に加担し、割れたのだ。

すなわち、足利政氏・上杉顕実と足利高基・上杉憲房の対立である。

この無意味を説く扇谷上杉朝良の仲介も失敗した。

房総では形式的に里見氏が政氏支援に立ち、原氏が高基支援に回った。これは里見氏が秩序を重んじる姿勢を示し、原氏が新興勢力を受け入れたことを意味していた。

+++++

割れる家(3)

夢酔 藤山